西尾実の言語生活論に関する一考察

――「社会意識の発達」に焦点を当てて――

小久保　美子

A Study on the Theory of "GENGOSEIKATSU" by Minoru NISHIO : Focusing on the Concept of "the Development of Social Consciousness"

Yoshiko KOKUBO

本稿は、国語教育に言語生活概念を定位させるために、「社会意識の発達」に着目した西尾実の言語生活論の内実に迫ろうとするものである。

西尾は、「言語生活」の視座から言語を機能的なものとして捉え、その場合の言語は、「概念としての言語」「要素としての言語」「＜もの＞としての言語」から区別されなければならず、「働きとしての言語」「生きたことば」であると規定した。そして、この「生きたことば」とは、「通じ合い」を目的とした「愛語」の精神に通じる「真心そのものから迸り出たことば」であり、さらにそれは、「社会意識に徹した生き方の熟達」によって生まれる言葉であると主唱した。

「社会意識の発達」に着目した西尾の言語生活論は、コミュニケーション不全が叫ばれる今日にあって今なお、私たちの前に燦然と輝く普遍の価値をもつ理論であり、多くの実践的示唆を与えるものである。

はじめに

小久保(2005)[1]は、国語教育における「言語生活論」を実践可能な理論として確立すべく、第一の手続きとして、時枝誠記(1900-1967)の「言語生活論」に関する考察を行った。そこでは、言語生活を生活の目的達成の手段としてとらえる時枝の言語生活観、すなわち、「衣食住のために」「社交のために」「政治のために」「教養のために」という生活の目的の下に、その手段として言語生活をとらえるという立場からは、目的達成のための作法としての言語技術論は生まれても、「創造的な言語生活を営む」という言語生活論が見えて来ないことを指摘した。

言語生活を向上させるには、日常的に行われている対話（問答）・会話レベルの言語生活にこそ目が注がれなければならない。本稿では、この日常の談話段階に言語文化への萌芽があるとし、話し言葉を言語生活の地盤段階に据えた西尾実(1889-1979)の言語生活論について考察を進めていくことを目的とする。

1.「言語生活」を視座にした言語観

西尾(1948)は、戦後いち早く『言葉とその文化』において、「聞く話す言葉（地盤段階）→読み書く言葉（発展段階）→言語文化（発展段階）」なる言語生活の基本体系を打ち出した。それ以後も、国語教育の領野において、言語生活論に基づく学習指導論を盛んに展開した。その陳述は、『言葉とその文化』も含め、1961(昭和36)年、『言語生活の探求』[2]という一冊の本にまとめられ、世に問われることとなった。

まず、西尾が、「言語」「言語行為」「言語生活」をどのような関連で捉えていたかを見ていくことにしたい。

西尾(1963)は、「言語」と「言語行為」と「言語生活」の三者の関連そのものについて、直接的には論じていない。また、「ことば」や「言語活動」の語も多く見いだされる。ここでは、それらの語を含め、言語と言語行為（言語活動）と言語生活のうち、二者関係が間接的に述べられているところに着目しながら、西尾の「言語」「言語行為」「言語生活」の概念を捉えていくことにする。

西尾は、言語生活における言語の捉え方について次のように述べている。

> 言語生活というと、話したり、聞いたりする言語であり、書いたり、読んだりする言語である。言いかえると、働きとしての言語である。生きたことばである。だから、概念としての言語と区別され、要素としての言語と区別され、＜もの＞としての言語と区別されなくてはならない。そういう意味で、「言語生活」とは、これまでの国語学の「国語」と区別されなくてはならない[3]。(下線引用者、以下同様)

西尾は、言語生活という場合、話したり、聞いたり、書いたり、読んだりする言語で、＜もの＞としての言語と区別されなくてはならないとする。「働きとしての言語」「生きたことば」とも言い換えている。＜もの＞としての言語の存在を否定せず、「働きとしての言語」と「＜もの＞としての言語」を区別している。「言語」から「言語生活」へと思考を展開していった時枝に対して、西尾は、逆の思考過程を辿っている。すなわち、「言語生活」の枠組みから「言語」を捉えている。時枝と西尾のこの視座の違いは理念レベルに止まらず、国語教育の学習指導方法論の違いにまでつながっていく。いわゆる、「言語生活主義」対「言語能力主義」という言葉で対比されるところのものである。

では、言語生活から言語を捉え、そこでの言語を「働きとしての言語」または「生きた言葉」とした西尾は、「もの」としての言語をどのように位置づけていたのだろうか。西尾(1957)は、以下のように述べている。

> 国語学の国語を、わたしは蒸留水にたとえてきた。人によっては、「はたらき」としてのことばに対する、「もの」としてのことばとしてとらえるむきもある。が、その「もの」は、ただの「もの」ではない。はたらきとしてのことばから見ていくと、われわれの意

識の中に眠っている「もの」であり、辞書の中にたくわえられている「もの」であって、それは、いつでも、どこでも、だれにでも生かされる可能性を含んだ「もの」である関係からいうと、種子にたとえるのがいちばん適切ではないかと思われる。(中略) われわれの意識の底に眠り、辞書の中にたくわえられている語も、人を得、時と所の環境が備ってくれば、生命の芽をふく生きた種子である。[4]

西尾が、ソシュールのいうラングの存在を認めているのは、明らかである。ラングを種子にたとえ、それに生命を与えるのは人であり、時と所の環境が備わって芽をふくと述べている。「われわれの意識の底に眠り、辞書の中にたくわえられている語」がラングであり、「生命の芽をふいた生きた種子としての語」がパロールということになろう。この比喩を、教育論に照らせば、「人を得、時と所の環境が備って」の部分は、「主体の言語意識が醸成され、学習の場や状況などの環境が備わって」と言い換えられよう。ただ、「もの」としての語がどのようにして意識下に入るかということ、つまり語彙を豊かにすることについて、ここでは述べられていない。このことは学習論として極めて大切な点である。この点については、柳田國男の国語教育観、すなわち、「聴き方」という科目を大切にして語彙を豊富にし、選択を容易にし得るようにすること、経験をさせて言葉を持たせること、という考えを一つの指標にしながら、西尾の指導観を探ってみることも必要であろう。

次に、「言語」及び「言語生活」と「言語行為」との関係について論を進めることにしたい。西尾は、「言語行為」という語をほとんど用いていない。そこで、ここでは、「行為」という語に着目し、西尾の考えに迫ることにする。西尾(1959)は、以下のように、「言語生活」としてのことばは社会的行為、歴史的行為であるとする。

……人間と人間との「通じ合い」としてのことばは、一回的、個性的な要素を含んだ行為であって、いつでも、どこでも、誰でも共通におこなわれている、普遍的、客観的な要素だけを抽象した言語がその本質的要素をなしていることは事実であるが、そういう「抽象的概念」からはみだす要素を含み、しかも、それを特質としている点で、「言語生活」としてのことばは、社会的行為であると同時に、一種の歴史的な行為であるとしなくてはならない。[5] (傍点引用者、以下同様)

西尾は、この中で、「言語」と「ことば」を区別している。「言語」は、普遍的、客観的な要素としてのラングの意で、「ことば」は、ランガージュ(言語活動)の意で用いている。このような言語使用の変遷について、西尾は、「言語生活」の意味で「ことば」を用いなくてはならない場合が少なくないとし、「言語生活」という語を発見するまでに、「ことば」「言語活動」という語を用いてきたという経過を辿っていると述べている。[6]

これらの語の変遷を考慮しながら、先の引用文とあわせて、「言語」「言語行為」「言語生活」の関係を見てみることにしよう。

「言語生活としての」の「～としての」は、「言語生活として見た場合の」と言う意味に解釈される。したがって、「言語生活→ことば」というように、ことばをどこから捉えるかという視点の方向性を示すものとして表すことができる。「行為」まで含めて考えるならば、「言語生活→ことば＝社会的行為・歴史的行為」となる。すなわち、「言語生活として見た場合のことば、すなわち言語活動（ランガージュの意）は、社会的行為であると同時に歴史的行為である」の意味となる。「ことば」の代わりに、「生きたことば」（働きとしての言語）を入れれば、「言語生活→生きたことば（働きとしての言語）＝社会的行為・歴史的行為」と表すことができる。つまり、西尾は、「言語生活」という視座のもとで、社会的・歴史的行為であるところのことば（言語活動）を措定し、「生きたことば」、すなわち「働きとしての言語」を見いだしていったということがわかる。

では、西尾は、「生きたことば」や「働きとしての言語」をどのようなものとして捉えていたのだろうか。西尾には、「生きた言葉」という教科書に書き下ろした教材がある。田近洵一(1993)は、その教材に西尾が何を求めていたかを追究している。田近は、「生きた言葉」の教材文からの文言を引用しながら、西尾の主張を以下のようにまとめている。

この少年のことばが、「真心そのものから迸り出たものである点」で、道元禅師の「愛語」に通じるものがあるとし、「いのちが端的に言葉に現れ、言葉が直ちにいのちを発展させる境地に至って、初めて言葉が生きたものとなる」と述べ、次のような段落でしめくくっている。

> 我々は何よりもまづ我々自身の言葉を生きた言葉たらしめることによって、我々の心を拓きいのちを向上させなくてはならぬ。そして、それが、文を綴り、文を読む真の基礎であることを自覚しなくてはならぬ。

西尾は、ことばが人間を人間たらしめ、そのことで人間関係をひらいていくものであることを重視したのである。本教材の中で、真心から出たことばは、「これを聞く人の心を喜ばせるだけでなく、又、それを発した人の心をも開拓」するとも述べている。

戦後、コミュニケーションという新しい考え方がはいって来た時、西尾はそれを自分が求めてきた通じ合いと重ね合わせて、積極的に支持した。しかし、忘れてならないのは、西尾が求めたのは、真心に支えられた生きたことばによる通じ合いだということである。そして、そのような言語生活観の根底に「愛語」の精神があった。[7]

西尾の言う「生きたことば」は、「愛語」の精神に通じるところの「真心そのものから迸り出たことば」である。「どう正しく表現するか」といったような言語技術を意識して出てきた言葉ではない。西尾(1949)の文言によれば、「社会意識に徹した生きかたの熟達」[8]によって生まれる言葉である。また桑原隆(1994)は、「主体的真実」という西尾の言葉に着目し、「主体的真実は、言語生活から言語文化へと貫く核をなしているものである。西尾の言語生活主義

国語教育論の根底にあるのは、『生活から文化への向上』であり、その向上の価値的志向の核をなしているのが主体的真実とみてよいのではないか[9]」と述べている。「生きたことば」は、主体的真実に基づく表現であると言うこともできよう。

西尾(1951)は、前述の通り、言語生活としてのことばを、「働きとしての言語」「生きたことば」と捉えたが、言語生活の構造、機能について、次のように述べている。

> われわれの言語生活を、その現実態について反省すると、それは言語学や国語学でいっている言語定義のような簡単なものではなく、きわめて複雑な構造と機能とをもったものである[10]。

西尾は、「働きとしての言語」「生きたことば」に、実際どのような機能を見いだしていたのだろうか。西尾が、言語生活としてのことばを社会的行為と規定したことについてはすでに述べた通りである。つまり西尾は、言語生活としてのことばに、社会的機能を見いだしていたのである。西尾(1950)は、そのような社会的機能をおろそかにしがちだったことを指摘し、その理由を次のように述べている。

> こういう社会的機能をおろそかにしがちであったのは、言葉を自己表現の働きとしてとらえ、表現と理解というような系列を立て、個人的な機能として分析していたためである。(中略)
>
> もっと広く、もっと日常的な、話し聞くことばの生態にむかえば、おのずから、言葉が自己表現というような個人的なものではなく、相手にわからせ、うなずかせ、行動させようとする、社会的な「通じ合い」であることが納得されてくる[11]。

時枝と西尾の言語生活観の違いは、究極のところ、この言語観の違いによるものである。また、その言語観の違いは、西尾の、「もっと広く、もっと日常的な、…ことばの生態にむかえば、おのずから、…「通じ合い」であることが納得されてくる」の見解に即して考えてみるならば、ことばをどの視点から捉えるかという探究の視座の違いによる。すなわち、時枝は、広く、日常的なことばの生態に向かうという方向ではなく、つまり、言語生活の方から言語を見たのではなく、個人の言語行為の成立をもって「言語」とし、そこから「言語生活」を見たために、「通じ合い」という概念よりも「伝達」という概念の方に重きをおく結果になったのであろう。

次項では、複雑な構造と機能を持ったものだと規定する言語生活を、西尾がどのように体系的に捉えていたのかを見ていくことにしたい。

2．社会意識を根基とした言語生活体系

言語生活の体系を考える上で大事な点は、ことばの働き、つまり機能をどう規定するかである。西尾が、それを社会的な「通じ合い」と規定したことは既述の通りである。また、こ

のような言語観に立つ西尾が、言語生活の機能は、口ことばとよばれる談話生活と、書きことばとよばれる文章生活と、文学・哲学・科学などとよばれる言語文化との諸形態を成り立たせているとしたことも周知の通りである。

西尾(1961)は、このような機能的発展を示している言語生活について体系化を行っているが、「言語生活としてのことばの機能」→「言語生活の機能」→「言語生活の体系」と順次思考を進めて行く過程の中でつきあたったことは、次のことであった。

……ことばの機能を考え、その体系的発展を問題とするたびにつきあたったのは、ことばの発達は、民族においても、また個人においても、けっきょく、主体の社会意識の発達によるものであるということであった。したがって、言語生活の向上は、社会意識の発達を根基として可能になるということであった。[12]

西尾は、言語生活の向上をことばの発達に見ており、そのことばの発達の源を社会意識の発達においている。そして西尾は、「その社会意識は、現実的にいうと、相手をどう意識するかということであって、量的な広がりと質的な深まりとのふたつの方向がある[13]」というように考えを進め、この社会意識の量的な広がりと質的な深まりを基準として、言語生活を体系化したのである。以下に、それをまとめてみよう。

＜社会意識の量的な広がりを基準としたもの＞

○　一対一　→　立場のわかっている仲間同志…「直接性の明瞭な関係」

○　一対多　→　　〃　　…「他者的存在を内包した関係」

○　一対衆　→　立場のわかっていない公衆　…「他者的存在の関係」

西尾は、このように、主体の社会意識の広がりは、「二種三類」として概観することができるとしている。つまり、二種は、「立場のわかっている仲間」「立場のわかっていない公衆」であり、三類は、「一対一」「一対多」「一対衆」である。なお、この言語生活体系の二種三類を、さらに、談話生活と文章生活に応じて、それぞれ「対話・問答」「会話・討議」「公話・討論」、「通信・メモ」「記録・報告」「通達・読みもの」というような形態に分けている。深さにおいても、次の三つの段階が考えられるとしている。(実際は、社会意識の広さにも、深さにも無限の程度なり段階なりがあると、西尾は述べている)

＜社会意識の深まりを基準としたもの＞

第一は、相手を認識した立場　　(相手は何を求めているのか)

第二は、相手の気持ちを理解した立場(相手はどんな気持ちでそれを求めているのか)

第三は、主体と相手との一体化の立場(自己否定の上に成り立つ、自他の対立をこえた、絶対の立場)

西尾が、社会意識の広がりに止まらず、深さをも追究したことは、ことばの発達、すなわ

ち、言語生活の向上という点からして、極めて重要なことであった。なぜならば、社会意識の広がりだけでは、「伝達」の域を出ないからである。ここに、社会意識の深さという視点を投入することによって、「通じ合い」としての言語の立場が確立する。つまり、社会意識の広がり（相手は一人か、複数か、多数か、或いは、仲間か、公衆か）に止まっていたのでは、西尾の文言を借りれば、主観的、一方的態度を克服することができないのである。ここに、社会意識の深まり（相手は何を求めているか、相手はどんな気持ちでそれを求めているのか）の視点が入ることによって、相手の気持ちを摂取した、総合的、積極的態度（西尾の言葉）に出ることが可能になり、「通じ合い」が成立すると考えられる。ここに至って、初めて言語生活が向上すると言える。なお西尾は、社会意識が質的に深まっていくにつれ、そこにおけることばは、いっそう客観的になり、普遍性の度が高くなっていかなければならないと述べている[14]。この文言から、西尾が、ことばの発達の視点の一つを、「日常言語の使用から客観性、普遍性の度の高い言語使用」においていたことがわかる。すなわち、客観性、普遍性の度が高くなるにつれて、言語生活における言葉は、精緻化し文化度が高まるということである。換言すれば、言語生活の体系は、ことばの客観性、普遍性の度合いからも見ることができるということである。

また西尾は、社会意識の深さは、「主体たる自己のはたらき」であるから、「主体の能力として展開する」と述べ、一対一の場合でも、一対多の場合でも、一対衆の場合でも同じであるとしている[15]。西尾が、社会意識の深まり、つまり相手への意識の持ちよう、態度を「能力」としている点は、見落としてはならない。社会意識の深さと「能力」との関わりについて、さらに西尾の考えを見てみよう。

西尾は、上述の社会意識の広がりと深さの類別なり種別なりは、西尾自身の観察と内省に即して試みたものであるとし、「現代のわが国における政治家の言動にも、文化人の言論にも、このような主体の社会意識のふかさというものは、まったくといっていいほど欠如している」と指摘する。さらに続けて、「ことばの能力といえば、ただ通りいっぺんの話し聞き、書き読む方法としての技術だけにかぎられている。これ（社会意識のこと――引用者注）が、われわれの社会生活を向上させ、有力な文化を創造するために欠くことのできない原因であることを、あらためて自覚しなくてはならない」と結んでいる[16]。つまり、社会意識の深さの発展が、言語生活の向上の要因であると結論づけているのである。西尾は、また、ことばの能力・技術と社会意識との関連について、次のように述べている。

> ことばの能力といえば、話し聞き、書き読む能力であるが、それをさらにつきつめていうと、話し聞き、書き読む技術を基礎づけている、主体の社会意識の広さと深さであるとしなくてはならない[17]。

西尾は、「ことばの能力」の根源は、「話し聞き、書き読む技術」であるとし、それを基礎

づけているのは「社会意識」であるとする。つまり、「ことばの能力」、すなわち、「話し聞き、書き読む技術」を育成するには、社会意識を醸成しなければならないということである。この西尾の考えは、言語生活におけることばの機能、その体系的発展を考えていく過程において、西尾が思考を重ねた結果、見いだした一つの重要な結論であった。そして、その思考の根底にあったものは、言語生活の向上という視点であった。

ここで、「二種三類」の言語生活体系を見いだすに至った西尾の思考過程を改めて整理してみることにしたい。

（1）まず、頭にあったのは、言語生活上の種々の問題であった。

（2）その問題を解決するために、即ち、言語生活の向上を図るために、言語生活の視野から言葉の機能を考え、その体系的発展を問題とした。

（3）そこで、つきあたったのは、ことばの発達ということであった。

（4）ことばの発達は、主体の社会意識の発達によるものであるという認識を得た。

（5）言語生活の向上は、社会意識の発達を根基として可能になるとの結論を得た。

（6）社会意識には、量的な広がりと質的な深まりの二方向があるとした。

（7）その二つを基準にして、言語生活を二種三類に分類し、体系化した。

このように見てくると、（5）の「言語生活の向上は、社会意識の発達を根基として可能になる」という結論が、西尾が言語生活の体系的発展を考究していく上での柱になったことが理解できる。

なお、この探究過程において、西尾は、主体の社会意識の深さの展開は、「主体の能力」として展開するとし、「社会意識の深さ」を「ことばの能力」「ことばの技術」と見ていたことも整理の観点に付加しておく必要があろう。

主体の社会意識という視点から、言語生活の体系的発展の問題を取り上げ、二種三類の言語生活体系を見いだした西尾は、さらにそのような言語生活の機構を成り立たせている要素に着眼し、要素的分析をおこなうことが可能であるとしている。そして、モウルトンの文学形態成立論に示唆を得ながら、南北軸に表される「思う」という主体的な思考作用と東西軸に表される「見る」という客体的な認識作用との交点が文学の生産点、もっと根本的には、ことばそのものの発生点であると考えるようになったと述べている[18]。これについては、人間の思考のはたらきと関係することであり、次項にて、改めて論述することにしたい。ここでは、そのようなことばの発生点を見いだした西尾が、それをどのように言語生活体系の中に取り込んでいったのかを見ていくことにする。

西尾(1959)は、言語生活は、「文章」「文」「語」、「音声」「意味」「文法」等の言語学（文法論）に基づく共通的・普遍的要素の他に、一回的・個性的な要素があるとし、それを言語学に倣って体系化しようとした。西尾は、この一回的・個性的な要素を抽象した考察を、言語

美学（文体論）とし、その要素は、形態的種類（genre）を決定し、様式（Stil）を成立させ、思想（ism）を規定するとする。そして、言語生活の要素的分析は、言語学（文法論）と言語美学（文体論）の両方からおこなわなくてはならないと考え、この両面からの考察が言語体系をなり立たせているのではないかと結論づける。

西尾が言語美学に基づき、言語生活の一回的・個性的要素をも体系（これを、西尾は「言語美学体系」と呼んだ）化し、旧来の言語学体系との両面をもって、言語生活体系としたことの意義は大きい。それは、言語生活の諸形態の共通単位を「文章」においたことである。つまり、西尾は、「思う」という南北軸と、「見る」という東西軸の交点を「ことばの発生点」としたわけであるが、それをまた、「主題」（「思想」）が、「文意識」や「語意識」ではなく、「文章意識」として表れたものであると捉えたのである。言語生活における共通単位を「文章」においたというのは、この意味である。

また、西尾は、「文章」という言語生活の諸形態の単位を見いだしただけでなく、文章の生産機能をも見いだしている。すなわち、通じ合い（言語生活）としての文章（談話においても同じ）は、文章の「主題」が「構想」としての「段落」を生み、さらにそれが「文」や「句」を展開させ、「語」を決定させて叙述を成り立たせるのだという文章の生産機能である。書くはたらきの方向は、あくまでもこの流れで、逆は成立しないと力説する。西尾は、この過程について以下のように述べている。

> 総合と分析を繰り返しながら分析の一途を辿って具体化し、通じ合いのことばとしての「文章」を生産する。たとえ一文が一文であっても、一句が一文章であっても、その「文章」を成り立たせている意識の次元においては「文章」としての機能がなりたっている。なんとなれば、その機能は同一次元における平面的な展開ではない。ある次元からある次元への立体的な発展である。したがって、その逆はあり得ない。その意味で言語構成論は、すでにかかれた「文章」への説明としては成り立っても、書かれる「文章」の機能的な展開を捉えた考察ではあり得ない。
>
> したがって、「文章」の読解も全体から部分へという方向をとらないと、ほんとうの理解は成り立たない。[19]

このように、西尾は、言語生活は、文章論・文論・語論を成り立たせ、文法学の領域を形成していると見たのである。また、文章の生産の機能を、同一次元における平面的な展開ではないとし、より高次な次元への立体的な発展であるとする。「総合と分析とを繰り返しながら分析の一途を辿って具体化し」という表現をも用いている。言語生活において文章（談話）を生産するこの機能プロセスは、作文指導あるいは談話指導に対して極めて重要な示唆を与える。すなわち、作文指導等において何を優先に考えなければならないかについて、端的に言うならば、「型」か「内容」かという二元論に対して、「内容」（主題）が先であるという一

つの解答を与えるものである。

本項の最後に、西尾は、言語生活において「聞く」「話す」「読む」「書く」という言語形態をどのように捉えていたのかを見ていくことにしよう。西尾は、「話し聞き」「書き読む」というような、「話す」と「聞く」、「書く」と「読む」を一体化した表現を用いている。これは、「聞く」「話す」「読む」「書く」を四つの言語形態として区別し、それぞれを「異質な言語生活」とした時枝の考えと大きく異なる点である。この違いは、ことばの機能をそれぞれ、「伝達」・「通じ合い」とした、時枝・西尾の言語観、ひいては言語生活観の違いによる。言語生活におけることばの機能を「通じ合い」とした西尾は、「話す」・「聞く」、あるいは、「書く」・「読む」といった一方向の活動として捉えてはいなかった。別言すれば、「話しては聞き、聞いては話す」、あるいは、「書いたら読み、読んだら書く」といったように、主体の社会意識が発達していてこそ成立する、双方向の一連の言語活動として捉えていたということである。西尾(1961)は、このことを「共同体」ということばを使って、次のように述べている。

> ことばが人間の通じ合いの社会的行為であるとすると、それは話し手と聞き手、もしくは書き手と読み手との間に行われる伝達、すなわち発送と受容というような、一方交通的なはたらきではなく、その話し手と聞き手、もしくは書き手と読み手とは、それが一対一の関係であろうとも、それは自己と他己というような関係をとった一種の共同体に他ならない。それどころではない、その相手が人間以外の存在であっても、その言語行為の主体は一種の共同体制をとらなくてはならない。[20]

長谷川宏(1978)は、『ことばへの道』の中で、人間はことばをかわせないではいられない存在であるとし、次のように述べている。

> 人間はことばによってたがいの観念や意思や感情をつうじあう。これはうごかしようのない事実である。悠久の昔にことばを発して以来、人間の生活はことばをぬきにしてはかんがえられないものとなった。(中略、原文改行) ことばをかかわりあうという人間意識の事実は、意識の可能性と必然性とをふたつながらにいいあらわす事実ととらえなければならない。ひらたくいいなおせば、人間とは、ことばをかわすことができるとともに、ことばをかわさざるをえない存在である。(中略、原文改行) 人間は、他人とのあいだに共同性をうちたてるために、かならずどこかで普遍的な主体として、また、象徴的な主体として、たがいにむきあわねばならないのだ。言語場とは、まさしく、そのような普遍的かつ象徴的な主体がむかいあう共同性の場を意味する。[21]

長谷川の文言は、西尾の「ことばは人間の通じ合いの社会的行為である」という主張と同じことを哲学的な立場から述べたものと解される。長谷川は、人間がことばによって通じ合う存在であることは動かしようのない事実である、人間の生活はことばをぬきにしては考えられないものとなったと述べている。長谷川のこれらの文言は、「言語生活」をいかなる視点

で捉えるかという際に重要な示唆を与えるものである。筆者は先の論考[22]において、「言語生活」を経済生活や社交生活等人間生活の一つと捉える国語学関係者らの見方と、柳田のように、「ふつうの生活と対立して別に『言語生活』というようなものがあるような感じを与えるのは困る」とする考えとがあったことを述べたが、人間とことばとの現実の関わり、つまり、長谷川の言う、「人間とは、ことばをかわさざるを得ない存在である」という事実を直視すれば、「言語生活」を他の人間生活と並ぶところの一つという見方は、人間とことばとの事実に即したものではない。

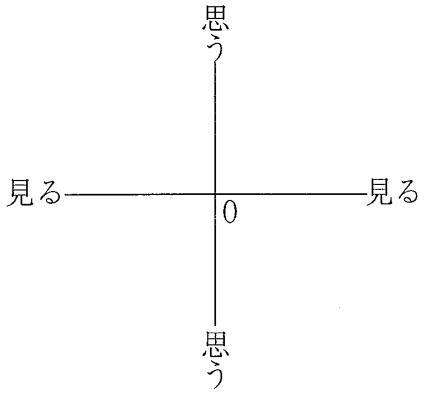
これまでの我が国の国語教育は、言語を要素的に捉え、「言語教育」の立場を強く意識しすぎたために、「言語生活における共同体としての人間の存在」のあり方に即さないことばの指導をしてきたというのが実状であるといっても過言ではない。西尾の「共同体」という自他の関係は言語生活を捉える上で極めて重要な概念である。さらに、西尾は、「共同体」関係を人間以外の存在にもそうあるべきだとしているが、この視点は、松崎正治(1996)[23]が指摘するように、主観と客観問題を解決しようとする西尾の姿勢の表れの一つとみることができる。そして、事物に対しても「共同体制」をとるという考えは、前述した「見る」という客体的認識作用の内実の姿を言い表したものであると言える。

これまでの考察から、西尾が、言語生活体系を、「表現・理解」の二系列ではなく、「話し聞き」「書き読む」という双方向の言語活動として捉えていたということ、また、そこにおける人間関係を共同体として捉えていたということが明らかになった。そして、西尾にこのような見方をもたらしたものは、人間の社会意識の発達が言語生活の向上の根基であるとする言語生活観であったと言えよう。

3.「言語生活としての思考作用」の成立条件

最後に、西尾が、言語生活において、「考える」という営みをどのように位置づけていたのかを見ていくことにしたい。西尾(1961)は、「言語生活」と「考えること」との関係について、以下のように述べている。

> ……読むことも考えることである。書くことも考えることである。聞くことも考えることである。話すことも考えることである。(中略)
>
> 言語生活の根本をなしている「考えること」は、いうまでもなく、「感じること」をも、「知ること」をもふくんだ「考えること」である。(中略) さらにいうと、主体的な思考・感情と客体的な対象認識との統一である。(中略)
>
> いま、このような、言語生活としての言語の発生点を図示すると、(中略) すなわち、この「考える」という主体的思考・感情のはたらきと、「見る」という客体的認識のはたらきとの統一点(0)が、ことばの発生点であると考えられる。つまり「思ったとおり」



とか「感じたとおり」とかいったところで、「見る」とか「聞く」とかいうような客体的認識にふれないかぎり、言語生活としての思考作用を成り立たせることはできない。

同様に、「見たとおり」とか「聞いたとおり」とかいったところで、「考える」とか「感じる」とかいうような主体的思考に統一されないかぎり、言語生活としての思考作用を成り立たせることはできない。[24]

西尾は、「言語生活」の根本をなしているのは、「考えること」だとしている。「考えること」の中には、「感じること」「知ること」も含まれている。さらに、ことばの発生点を、「考える」の主体的思考・感情と、「見る」の客体的認識との統一点に求めている。

西尾は、「考えること」を言語生活の根本であるとした。ここでは、「考えること」がどう言語生活の根本をなしているのかについて、「主体的思考・感情」、並びに「言語生活としての思考作用」という西尾のキーワードに着目しながら、考察を加えていくことにする。

西尾は、言語生活としての思考作用を成り立たせるための条件として、「見る」（聞く）という客体の認識作用と、「考える」（感じる）という思考作用の二つを挙げている。つまり、この二つが統一されることによって、ことばが発生するというわけである。言語生活としての思考作用の第一を「ことばの発生点」に求めたことの教育的意義は大きい。西尾は、作文指導の例を挙げ、「思ったとおりに書け」とか、「感じたとおりに書け」、あるいは、「見たとおりに書け」とか、「聞こえたとおりに書け」とか指示する場合でも、ことばとして書いたり、言ったりするには、「考える」とか「感じる」とかいうような主体的思考と、「見る」とか「聞く」とかいうような客体的認識とが統一されていなくてはならないと述べる。[25] 教育論から言えば、ことばを生み出すための個々人のものを見たり聞いたりなどの客体にふれる経験を大事にすることが必要であるし、さらに、その経験を通して主体の考えや感想が統一されるのを促すことが必要だということになる。

「考えること」を言語生活の根本とする西尾の捉え方は、柳田國男の見方と共通するものである。西尾の言う「考えること」を、柳田は、「思い言葉」として述べていた。柳田は、「思いかた、覚えかた、感じかた」を身につけさせるのも国語教育であるとしたが、西尾も言うように、「感じる」、いわゆる「感覚」「感性」は、「考える」こととともに、国語教育にあっては重要な概念である。言葉を生み出すのは、それらによるところが大きいからである。中村雄二郎(1997)は、「感覚」について、ルソーの『エミール』を引きながら、次のように述べている。

ルソーは『エミール』第二編のなかで言っている。およそわれわれ人間のうちに最初に形づくられる能力はなにかといえば、それは感覚である。その点からして、本来われ

われがまず第一に育て、開発しなければならないのも感覚であるはずである。(中略) 感覚を訓練するということは (中略) 感覚を通して正しく判断することを学ぶことであり、すぐれて感じるのを学ぶことである。なぜなら、≪われわれはただ、すでに学んだようにしか触れることも、見ることも、聞くこともできない≫からである。すなわち、感覚とはつねに変わらない或る一定の能力ではなくて、訓練をとおして完成されていく能力であり、しかもひとは自己の学び、習得した感じ方によってしか、対象を感じることができない。感じるということはすでに感覚をとおしてなにかを判断していることだからである。[26]

「ことば」の教育である国語教育は、何かについて「感じる」を、その出発点としなければならない。まず「感じ」なければ、考えることにつながっていかないからである。西尾は、「感じる」を「考える」に含めているが、厳密に言うならば、「感じる」を人間の原初体験とすべきであろう。柳田の言う「感じかた」を身につけさせるために、どのような経験をさせるか、それは教材論とも関わる重要な視点である。

また、ことばと経験との関わりについて、西尾の「ことばの発生点」という考え方と、柳田の「人は持ったことばでないと使えないのだから、それを経験させる事」という考え方とに、共通点を見いだすことができる。すなわち、柳田の「ことばを持つ」ということが、西尾の「ことばの発生」に対応し、西尾の「見る」「聞く」という客体的認識作用は、柳田の「ことばを経験する」に対応する。柳田の「ことばを経験する」という意味は、「どういう時に然るべきことばを使うのかを経験する」ということを意味しており、その経験を通して生み出される適当なことばというのは、客体をよく見る、または聞くという経験を通して発生するということである。

さらに西尾(1966)は、「考える」という主体的思考と「見る」という客体的認識との結合点がことばの発生点であるということを、以下のように、言語生活における文学の面からも述べている。

言語生活における文学は、(中略) 言語生活の完成段階であり、特殊領域である。どんな点で完成段階であるかと言うと、「思う」という主体的思惟と「見る」という客体的認識との結合点が発生点である点で、それは時枝氏が『日本文法　口語編』で言われているように詞・辞の統一であるから、言語の発生点であり、その結合のしかたが様々である中で、文学創造の場合は、主体的思惟と客体的認識とが一元的相即を前提として展開してくる、物我相応の体験であるから、それは言語生活における高次な特殊領域として成立する。[27]

そして、「この消息を最も的確に告白しているのは、『三冊子』に遺された芭蕉のことばである」と続け、そのことばを引用している。

句作になるとするとあり。内をつねに勤めて物に応ずれば、その心の色、句となる。内をつねに勤めざるものは、ならざる故に、私意にかけてするなり。[28]

西尾は、この芭蕉のことばを、月刊誌『言語生活』の創刊号における、「言語生活の問題点」という論稿の中でも引用している。これらの西尾の文言は、言語生活の研究と文学研究とが西尾の中にあっては一体化していたということを窺わせるものである。また、時枝の「詞・辞の統一」との共通見解を述べている点も興味深い。しかしながら、その点に関するこれ以上の論究は他日に期さなければならない。

本稿を閉じるに当たって、「考えること」を言語生活の根本に据えた西尾の言語生活観が、創造的な営みとどう関わっているかについて論じておきたい。

西尾(1961)は、われわれの社会生活において話題がとぼしいことを指摘し、それは、われわれの生活が習慣的に流されていて、自覚性と創造性とにとぼしいことをものがたっていると述べている。「言うならば、言語生活における思考活動が浅く、足りないからである」と、話題の乏しさを、「思考活動の浅さ・不足」の問題として取り上げている。[29] また、話題が乏しいことは、生活が惰性的で自覚性と創造性にとぼしいことだとしている。このことから、西尾は、生活の創造性を話題に求めており、それには思考活動（考えること）を活発化させることだと考えていたことが窺える。つまり、西尾のこの文言は、「考えること」と生活の創造性との密接な関わりを言い表したものだと言える。

では、西尾は、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」と「考えること」との関連をどのように捉えていたのだろうか。西尾(1966)は、次のように述べている。

聞くこと・話すこと・読むこと・書くことが全円的関連をもった統一であるということは、聞くことも考えることであり、話すことも考えることであり、読むことも考えることであり、書くことも考えることであるという主体的構造が物語っている。したがって、言語生活は考えることとして営み、考えることとして徹底することによって、聞くことが話すことの根底となり、読むことが書くことの根底となる。しかも聞くことと読むこととは受身の立場に立って考えることであるが、話すことと書くこととは主体的に展開させる「考えること」である。[30]

西尾によれば、言語生活における「考えること」は、主体的構造のもとに全円的関連をもって統一的に展開される。したがって、「考えること」を徹底すれば、聞くことが話すことを促し、読むことが書くことを促すとする。「考えること」が徹底して行われる言語生活の下では、言語活動は、四形態に区別されるものではないのである。「聞く」「読む」は、「見る」と同様に客体的認識にふれることであり、「話す」「書く」は、徹底した客体的認識によって生じた「考える」「感じる」「知る」などの主体的思考・感情が統一されて、発生したことばの姿であると言える。すなわち、ことばの発生は、創造的な営みであり、それは、徹底した「考える」

という主体の態度に裏付けられたものなのである。

西尾が、「考えること」を言語生活の根本においたことは、国語教育における「読むこと・書くこと・聞くこと・話すこと」の関連学習へとつながっていく。

おわりに

本稿では西尾の言語生活論に焦点を当てて検討を重ね、時枝の言語生活論との違いを明らかにしてきた。今後は、それぞれの言語生活観から生み出された、時枝の「言語能力主義」国語教育論と西尾の「言語生活主義」国語教育論を比較対照し考察を加えていくことを通して、言語生活の向上を意図した国語教育の基本的立場を確立していきたい。

1　小久保美子(2005)「時枝誠記の言語生活論に関する一考察」『千葉敬愛短期大学紀要』第27号 pp.59-76

2　西尾実(1961)『言語生活の探求』岩波書店

3　西尾実(1963)「これからの言語生活と国語教育」『西尾実国語教育全集』第六巻　教育出版　p.83

4　西尾実(1957)『国語教育学序説』あとがき『西尾実国語教育全集』第五巻　p.137

5　西尾実(1959)「言語生活についての一考察」『西尾実国語教育全集』第六巻　p.14

6　同上書　p.12

7　田近洵一(1993)『現代国語教育論集成　西尾実』明治図書　pp.388-389

8　西尾実(1949)「生活技術としてのことば」(『女性線』所収　女性線社)

西尾は、「生活技術としてのことば」と題する本稿において、「社会意識に徹した生きかたの熟達」という文言を使用している。このことから、西尾の捉える技術は、「社会意識」に根ざすものであると解することができる。技術育成論からすると、このような意識は、どのようにしたら育てられるか、「方」や「型」を与えることによって果たして醸成されるのか、その辺りが論点となるところである。

9　桑原隆(1994)「言語生活主義国語教育論（西尾実）の究明――主体的真実をめぐって――」『森野宗明教授退官記念論集　言語・文学・国語教育』　三省堂

10　西尾実(1951)『国語教育学の構想』『西尾実国語教育全集』第四巻　p.41

11　西尾実(1950)『言葉とその文化』第四冊『西尾実国語教育全集』第四巻　pp.303-304

12　西尾実(1961)「社会的行為としてのことば」『西尾実国語教育全集』第六巻　p.35

13　同上書　p.35

14　同上書　p.36

15　同上書　p.38

16　同上書　pp.43-45

17　同上書　p.42

18　西尾実(1959)「言語生活の体系とその要素的分析」『言語生活の探究』岩波書店　p.135

西尾は、モウルトンから得た示唆について次のように述べている。

昭和初年に刊行した『国語国文の教育』以来、文学作品の分析をさまざまな角度から試みて、ことばの問題に当面してきたわたしは、当時の国文学に影響を与えたモウルトンの『文学の近代的研究』における文学形態成立論のなかで、詩と散文の発生的根拠をReflectionとよばれる南北軸と、これと交叉する東西軸DescriptionとPresentationに求めていることに教えられ、これは、けっきょく、人間の「思う」という主体的な思考作用と、「見る」という客体的な認識とが結合するところから、詩も散文も発生するものであると考えるようになった。

19　西尾実(1959)「ことばの機能的構造」(『言語生活の探究』 pp.62-63)

20　注12に同じ　p.57

21　長谷川宏(1978)『ことばへの道』勁草書房　pp.122-123

22　小久保美子 (1998)「「言語生活」概念の生成・展開過程」『人文科教育研究』第25号 人文科教育学会

23　松崎正治(1996)「西尾実の行的認識の教育論の史的検討」『国語科教育』第四十三集 全国大学国語教育学会編　pp.80-89

松崎は、西尾が問題にしてきた二項関係は次の二点に集約されるとして、以下のように述べている。

1　精神と身体の二元性をどう考えるか (心身問題)

2　主観と客観は一致するか (主観―客観問題) (中略)

この主観と客観の一致問題が、フィヒテが取り上げたカントの問題点であった。西田幾多郎は、禅の思想に、フィヒテの「事行」概念を取り入れて、心身問題、主観―客観問題を解決しようとしたのである。(中略)

西田幾多郎は、訓練を重ねる中で、心身が一元化されていき、主観と客観が一致していくと考えていたのである。西尾実が、行的認識の教育論の理論的根拠として西田幾多郎の「事行 (Tathandlung)」(ママ)によって、確信を深めていったのは間違いない。

24　西尾実(1961)「国語教育の課題 (一)」『西尾実国語教育全集』第七巻　p.14

25　同上書　p.14

26　中村雄二郎(1997)『感性の覚醒』同時代ライブラリー　p.187

27　西尾実 (1966)「人間とことば」『西尾実国語教育全集』第八巻　pp.170-171

28　同上書　p.171

29　注24に同じ　p.15

30　西尾実(1966)「言語生活とその指導」『西尾実国語教育全集』第六巻　p.64